| 開催地名：京都府京丹後市 | |
|---|---|
| 開催日時 | 令和 3 年 12 月 24 日（金）　10:00～11:30 |
| 開催場所 | いの町役場本庁舎 1 階　「いのホール」 |
| 語り部 | 仲條富夫　　（千葉県旭市） |
| 参加者 | いの町職員　約 30 名 |
| 開催経緯 | 現在、町では若手職員を中心とした防災意識の向上に取り組んでいるが、多くの職員が大規模災害を経験したことがないため、予想を超えた混乱が発生し、動揺する中、様々な対応が求められることが想定されます。そのため、過去の災害体験や教訓を受け継ぐことで、大規模災害の際にいかにして復興を遂げていくのかという意識を持つことが町職員育成の課題です。 |
| 内容 | （1）東日本大震災発生時の状況<br>私は千葉県旭市で被災した。東日本大震災の発生時、飯岡小学校付近で津波の被害に遭ったが九死に一生を得た。飯岡小学校は一時避難所となり、子どもからお年寄りまで 400 人くらいが身を寄せた。<br><br>（2）震災直後の問題点について<br>震災から 2、3 日は災害を乗り越えようという気持ちがひとつになり、一丸となっていた。しかし、気持ちの落ち着いてきたころに、避難所をあたかも我が物顔で私物化する者が出てきたのである。校長室や職員室に入り込み、横柄な態度で占領していた。原因は市職員の手が回らず、指揮できなかったからだと考えられる。別の市からお手伝いとして職員がやってきたものの、よそ者として扱われ口出しすることはできない状態であった。<br>震災 2 日目には 1300 人近くのボランティアが受付に殺到。一番多い日では 1800 人にも達した。しかし、指揮できる役所の人間がおらず、ボランティアを勝手に動かすことはできない。対応しきれなかったボランティアには「次お願いします」とお断りするしかなかった。<br>世界共通で災害発生後に買いだめをする人が現れる。旭市では車を何台も所有している世帯が多かった。普段は燃料半分で生活していけるにも関わらず、ガソリンスタンドに駆け込み皆 10 リットル入れていく。買い占めなくても大丈夫と伝えても必ずパニックに陥る人がいる。避難所でも最初はペットボトルを家族の人数分配布していたが、お茶に替わり、ジュースに替わっていくにつれ、市民は不安な気持ちを覚えていった。「もうお水ないって」と子どもに話しているシングルマザーがいた。平常時であれば、飲み物を分けてくれる人はたくさんいるのに、皆自分のことで必死になり、 |

| | |
|---|---|
| | 優しい言葉をかけられなくなっていた。<br><br>（3）震災を通して得た教訓<br>どの地域・集落にも町内会や消防団、社会福祉協議会などがある。そういった人たちが先頭に立つことで話をまとめることはできると考えられる。被災すれば職員や役所の人間が必ずしも動けるとは限らない。だからこそ、町のことを良く知る人間が指揮を執ることで災害時も統制できるのではないかと感じた。いざという時のために機能する仕組みをつくっておくべきである。<br>市民に覚えておいてもらいたいことは、助けは必ず来るということ。もちろん、まずは自分を助けること（自助）が第一。そのあと近くを助けて（近助）、共に助かり（共助）、1 週間後に公助は遅れてくるものだと知っておいてほしい。それが理解できれば、物を奪い合うということもないだろうし、人にも優しくなれるはずである。デマに振り回されるということもなくなる。国からの支援金・義援金も出るから、慌てる必要はないと強く唱えたい。<br>「私のところは大丈夫」そう思って被害に遭う人はとても多い。災害はいつ来てもおかしくない状態だと思って、逃げる場所の確保など事前の備えは必ずしておくべきである。<br><br> |
| 開催地より | 防災マニュアルを備えていたとしても、いざ災害時に対応できる市職員がいない・足りないということは起こりうる問題である。全てを自分達だけで行おうとするのではなく、「もしもの災害」を乗り越えるために、事前に市や町の住民とコミュニケーションを取って仕組みをつくることが大切であると感じた。 |